
ハンティング！

ヘル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハンティング！

【Nコード】

N7357L

【作者名】

ヘル

【あらすじ】

とても素敵なグレイブランド共和国は今日も化け物天国。伯爵が吸血鬼になってるのは当たり前。下水道に人食い化け物がすnderのも当然。連続切り裂き魔に悪魔、そんなものが日常的に出現して被害を出す国なのだからハンターなんて仕事ができるわけで……。死んだ人間の魂を弾丸にする外道魂葬士スタークとその相棒、無敵魔神ガルベルダの危険な仕事を描くダークファンタジー。

「仕事ってのはなあ、準備をしっかりとした上でやるものなんだぜ？」（前書き）

戦闘の関係で話によっては少々グロいので苦手な方はごめんなさい。

「仕事ってのはなあ、準備をしっかりした上でやるものなんだぜ？」

俺の名前はスターク？アンホーカー、職業ハンターだ。ハンターと言っても猟銃をぶら下げた猟師の親父や、森で獲物を追ってる狩人を思い浮かべちゃいけない。主に街の中にいたらいけない生き物や『生きてない者』を狩っている所謂汚れ仕事の方のハンターだ。

今の俺は絶賛闘争中……改め逃走中だ。ちょっとしたコネで貴族の令嬢から依頼が舞い込んで、屋敷の調査をしていたのだが、ヘマを踏んで逆に標的に攻撃されているというわけだ。自己弁護するわけではないがヘマの原因は俺ではない。依頼を持ってきた令嬢がやらしてくれたんだが……まあそこまで含めて俺の仕事だから俺のヘマってことだ。

「諦める……この屋敷に生者の逃げ場は無いぞ……」

走って逃げる俺の後ろから屋敷の主人……もつとも今はすっかり
ノスフェラトゥ
吸血鬼になっちゃったハゲの出っ歯が、両手に発生させた紫色のプラズマ火球を投げつける。

「言ってるハゲジジイ！ちょっと待ってろよ、今返り討ちにしてやるから……よおっ！？」

ハゲジジイ……もといノスフェラトゥに中指立てて悪態をついた俺のすぐ足元に、プラズマ火球が着弾し爆風で前方に加速される。

「ちよっとスターク、危ないでしょう？ちゃんと前見て走ってくださいまし」

「ああ、わかったから黙っててくれ。今忙しいんだ」

すっ転びそうになった俺の小脇に抱えられた金髪巻き毛のロングヘアで豪華なドレスに身を包んだお嬢様、今回の依頼人にして今のピンチを作り出した超本人のイザベラ？フォン？ダンテスマイヤーは、今のピンチがまるでわかってないのかと言うほどにのんびりとした口調で俺に文句を言ってきやがる。

今回の依頼はこいつの親父が死んだ後、家督を継いだ叔父のアラ

ンドンが夜な夜な使用人達の血を吸っているんじゃないかと言うことで、俺に調査を頼んできたのだが……こいつはこともあろうに問題のアランドンとの夕食の時間に俺を招待し、その上でアランドンにノスフェルトウかどうか直接尋ねやがったのだった。しかもさつさと家督を自分に譲れと言う余計な一言付きで。

ダンテスマイヤー家は国内有数の領地を持つ伯爵家だ。イザベラは無能なアランドンには勿体無いから自分に寄越せと、しれっと言った。切れたアランドンはイザベラと俺をぶち殺すただけに正体を表しやがったのだった。ちなみに俺はイザベラの学友で隣国の伯爵家の次男坊という設定で招待され、アランドンが不死者や魔物でないか調査する予定だった。そのため格好は普段の戦闘服用の服ではなく、仕立てのいいフリルのついたドレスシャツにベスト、ズボンも宝石と刺繍がまぶしいお坊ちゃんスタイルだった。はつきり言って人を抱えて走る格好ではない。おかげで先ほどぎりぎり避けた火球で飛び散った建材に、さりげなく長髪を首の後ろで束ねていたミスリル製のバレッタを破壊されていた。この分の金は上乗せで請求してやる。

すでにほとんどの使用人は奴の眷属、屍食鬼グールになっており、食堂から抜け出すためにすでに3人を切り殺していた。走っている今もまた前方からグールが出現したので俺は空いている右手に握った長剣でそいつを切り捨てる。

「イザベラ……貴様だけは許さんぞ、私を無能扱いした貴様は血の一滴も残さず吸い尽くした後で私の眷属として跪かせてやる!!」

「何かあのハゲ相当頭にきてるようだな……また来るぞ!!」

ノスフェルトウの魔力のこもった特大のプラズマ火球が今まで走っていた廊下の上を焼き尽くしていく。

俺は何とか右側の通路に走りこみ回避した。そのままダッシュで無数にある部屋の一つに入り込む。

薄暗い部屋の中はごちゃごちゃした錬金術の道具で埋め尽くされている。錬金術師ではない俺からすると一見ガラクタにしか見えない

のだが、おそらくしかるべき道具屋に持っていけば一般市民が1年は遊んで暮らせるくらいの価値があるのだろう。この手の道具はえてしてそういうものだ。

「あら……ここは、お兄様の書斎ね」

どうやらここはイザベラの兄の部屋らしい。しばらく使われていないのかフラスコの中には腐乱したホムンクルスの残骸があったり、硬化してしまった柔らかい石があったりと、お世辞にも良い趣味とは言えない様相を呈している。

「お兄様とやらもここに住んでたのか？」

「いいえ、随分前に部屋を掃除しないからとお父様に勘当されて出て行ってしまいましたわ」

部屋を片付けないから勘当されるバカ息子ってのも何だが、確かにいいところのお坊ちゃんの道楽としてはこの部屋は不気味すぎるだろう。

「まあ、あのハゲの犠牲になってないだけマシか。さて、そろそろ仕事に取り掛かるから黙っていてくれよ？」

俺はそれだけ言う^{スクロール}と懐から巻物を取り出し、化け物退治の準備をする。……今日は襲われる予定はなかったのだ。調査だけして後日完全武装で一方的に攻撃するつもりだったが、目の前のお嬢様のせいでそうはならなかったのだから仕方ない。

スクロールに予め記録されていた魔法が発動し空間にウィンドウが開いた。

そのウィンドウの中には様々な人物の名前が記録されている。俺はその名前を高速で閲覧していく。

「うーむ……適当な魂つてのは、なかなか見つからないものだな……お、こいつはどうだ？」

俺はティモシーと書かれた名前を指定して、その名前に記録されていた詳細を読み取る。

ティモシー？ラヘッタ5歳、生没年1980～1985 遺言「ひもじいよ」ティモシーっていうかあだ名はヒモジー君だな。

「それ何ですか？」

椅子に座ったイザベラが怪訝な顔で尋ねる。

「こいつは死んだ人間の魂を記録する大魔法にリンクしているスクロールでな、そいつらを俺の目的に合わせて使役することができるんだ。まあ、効果は後のお楽しみだ」

ティモシー改めヒモジー君の魂をダウンロードし、俺の銃に装着された薬きょう式記憶媒体に蓄積すると銃身が青く発光した。

「見つけたぞ！！」

アランドンがドアを粉砕して現れたが俺の準備は完了していた。

「地獄の餓鬼魂を食らえっ！ 覇無愚痴威！！《ハングリー》」

俺が呪を唱えトリガーを引くと銃が轟音を放ち、先ほどの発光がそのままアランドンの胸に飛んでいき吸い込まれた。

「何の真似だ？」

アランドンに変化は無い。

「効いていませんわよ？」

イザベラが困惑気味に俺の方を見てくるが、その時変化は起きた。
ボコ

そんな音を立ててアランドンの腹がいきなり陥没したのだ。

「貴様……何をした？ うおおっ、私がっ無くなる！？」

陥没した腹を中心にアランドンの体がいびつに小さくなっていく。
180センチを超える長身がすでに5歳児並のサイズになっていた。

「俺は魂葬士をやっているね、今あんたに撃った弾丸には貧困で骨と皮だけになって死んだ哀れなヒモジー君（5歳）の魂の苦しみを増幅した邪悪な呪法が詰まっているんだ。いくらノスフェラトゥでも塵一つ残さずに食われたら復活できないぜ？ ……ってもう逝っちゃったか」

俺がせっかく説明してやっていたというのにアランドンは空間の揺らぎに吸い込まれるように消滅していた。一瞬空間の揺らぎが消える前にヒモジー君が笑顔で浮かぶがそれもまたすぐ消える。

「ミッシェンコンプリートだ。吸血鬼退治は終わったぜ？ お嬢様」

俺は依頼の達成を宣言するが、振り返ったイザベラは椅子の上で、静かに寝ていた。

「ハンターギルド」

「災難だったなスターク？」

ギルド兼酒場の『ヘルオアヘブン』で少し遅めの夕飯を取っていたら相棒のガルベルダがやってきた。

「まあな。お前の方の調査は進んだのか？」

ガルベルダの差し出すエールを受け取りながら相棒の仕事の首尾を確認する。

「うむ、だいたい目安はついた。明日の夜動くぞ。」

そう言いながら鋼鉄の体を持つ相棒は魔神オイルを一気飲みする。

小型の機械樽に表示された満タンを示す緑のランプがあつという間に赤に変わった。早えな、おい。

「いつ見てもあれなんだが：それ美味しいのか？」

「俺からすればお前らの補給している炭素の方が遥かに不味そうに見えるぞ？」

魔神族《マシン族》は魂を持った機械生命体の最上位機種だ。ここグレイブランド共和国には様々な人種が存在するが、生物として魔神族ほど優れた存在はまず存在しないといって良いほどだ。知能、戦闘力、生命力においては人間種では追いつきようが無い。ただし魔力があまり無く、絶対数が最も少ない上に勝手に増えたりもしないため、種族寿命自体は絶滅が危惧されていたりもする。ガルベルダは魔神族の中でも最高峰のエリート戦士であり、100人以上のハンターが所属するこのギルドでも稼ぎ頭と言える存在だ。

「わかってねえな、肉は美味しい偉いんだぜ？」

「なぜだ？」

「俺が好きだからだ」

「では魔神オイルも美味いし偉いな」

「なんでそんなことが言える？」

「俺の判断力は人間種より優れている」

いつものやり取りを済ませ俺はひとしきり笑った後に本題に入る。

「ところで、結局奴の正体は狂魔神だったのか？」

「うむ、明日は激戦になるぞ」

狂魔神、読んで字のごとく狂った魔神族だ。魔神族版のアンデッドみたいなものだといわれているが詳細は誰にもわからない。ただでさえ強力な魔神が活動限界を超えるほどの損傷を受けてなお自己再生し、自己増殖をするためまさしく不死身の化け物と化す。明日の仕事相手はそんな化け物だ。相棒のガルベルダが魔神族じゃなかったら一生関わりたくない相手だ。俺は駄目もとで聞いてみた。

「なあ、明日は腹痛が痛くて頭痛も痛くて親戚の叔父さんの葬式があつてイザベラの叔父さんも死んでるから休んでもいいか？」

「ふざける、俺の仕事を増やすな。お前の家に油かけて燃やすぞ」

俺の冗談に普通に物騒な発言で返すガルベルダの声は全く冗談が感じられなかった。

明日の準備のためにガルベルダと別れた俺は、魔銃にこめる呪法の選別をして今日の仕事収めとした。

「仕事ってのはなあ、準備をしっかりと上でやるものなんだから」
(後書き)

1話目読破ありがとうございます。あらすじのガルベルダが無敵魔神ぶりを発揮して活躍するのは2話目からとなります。ロボの活躍が楽しみの方は期待してお待ちください。不定期になります但し連載してみたいなと思って書き始めた話なので気に入っていただければ幸いです。感想お待ちしております。

「薄っぺらな美などいらない。最も重要なのは気合いと根性だ」 (前書き)

今回の話は過激な描写を含むためR15指定相当です。ご注意ください。

「薄っぺらな美などいらぬ。最も重要なのは気合いと根性だ」

切り裂き魔という怪人の名前が囁かれたのは先月の頭だ。路地裏で大人気のベティという娼婦が鋭利な刃物で解体されて転がっていたのが最初の事件。ベティは情報屋もやっていたから、何かの証拠隠滅じゃないかと憶測を呼んだ。翌日魔法医のフレッカという女が仕事帰りに解体されていた。フレッカは美人で腕がいいと評判だったが殺される理由が無かった。さらに翌週、ヘルオアヘブン所属のキンバリーという女剣士が、町外れにある坑道の前で解体されて発見された。さらにその次の日には花屋の看板娘マリーが……と、リップパーは一週間に2件ずつ殺人事件を起こしていた。どの死体も顔がめった切りにされていた。都市警察は美人を狙った通り魔事件として全力で捜査に当たっていたようだが目撃情報から推測された犯人像は狂魔神だった。このグレイブランドでは変な生き物と死ニモノにはことかかないが、腕が六本、全てに刃がついていて銃弾が効かず音もたてずに奇襲できる者となるとそうそう該当するものはいない。しかしどんな奇怪な特徴でも魔神ならありうるのだ。もっとも個体数の少ない魔神の照合は簡単のため、照合に一致しない場合は既に変成してしまった狂魔神ということになる。都市警察だけでは荷が重いと判断され、俺達にも御鉢が回ってきたというわけだ。

「で、ガルベルダさんよ、どうするつもりだ？」

俺は予測されうる出現ポイントで待機する相棒に尋ねる。リップパーは美人しか狙わない筋金入りのシリアルキラーだ。標的がないところに出てくるはずはない。

「俺の妹を呼んでみた。所謂囃作戦だ。ここで合流するから戦闘準備をしておけ。」

俺の顔は完全に硬直していた。我が相棒ながらにこいつは何を言っているのだろうか？目の前にいるガルベルダは身長220センチ

ほど、分厚い胸部と背部の装甲から体の厚みは150センチ近くあるように見える。全身は鎧を着た人間のようなシルエットをしているがその頭、肩や肘、膝には凶悪な突起物が生えており、青い光を放つ眼光を備えたその顔は魔神族という美男、鬼神顔と呼ばれる牙を模した装飾の施されたフェイスマスクが覆っている。何も知らないガキがガルベルダを見たらキラキラの目を輝かせて小汚い手で触ろうとすることだろう。こいつの外見はそういう外見なのだ。魔神族の血縁関係というものがどんなものだか俺にはわからないが……少なくともガルベルダそっくり、または少しでも特徴が似た女が来たらリッパは絶対に現れないと思う。

「なあ、この作戦……」失敗だろ？と言おうとしたところでガルベルダが俺のセリフを遮る。「む、来たぞ」

そう言っただけでガルベルダが視線を向けた方向から走って来るのは、翡翠色の髪をポニーテールにまとめた青い目の少女。ゆったりとした長袖から露出した肩とミニスカートから伸びる脚線美、その肌の色は抜けるように白く……って、いかん！見とれてる場合ではなかった。少女の後ろ数m地点にリッパらしき狂魔神がいた。

「おい、ガルベルダ、関係ない娘が巻き込まれているぞ！？助けにいくぞ！！」

「ん？作戦通りだ。エメラルダ、こっちだ！」

エメラルダと呼び掛けられた少女は、先ほどまでとは比べ物にならない速度で加速すると、瞬時に俺の目の前までやってきた。入れ違いにブースターを吹かしたガルベルダがリッパに肉薄する。ここからは距離があるため小さく見えていたが、六本の腕を持つひよろ長いリッパは、ガルベルダより頭一つでかかった。黒い騎士の鎧の背中から虫のような腕を生やしたリッパの手にあたる部分は鋭利な刃物になっていた。本来首にあたる部分からは女の腹から上が生えており、その長い黒髪を生やした頭にへばりつく白い顔は醜く膨れ上がり、能面のお多福のようになっている。はっきり言って気持ち悪い。

「覚悟は良いか？」

突然目の前に現れたガルベルダに間合いに入られたリッパーは金切り声を上げながらガルベルダの装甲にその刃を振るう。一本が50センチを越えるだろう死の刃がガルベルダに刺さってしまった……ようにみえたが、全ての刃が折れ飛び、食い込んだように見えただけであった。ガルベルダの装甲は厚さ5mの鋼材を500分の1の厚さに圧縮し、魔法で補強された特注の鋼鉄製の複合装甲だ。余りの重量にガルベルダ以外に需要がないどうしようもない装甲だが、防御性能にのみ特化されたその装甲に刃物など効くはずかない。お返しとばかりにガルベルダの右の拳がリッパーの顔面に叩き込まれた。分厚い装甲に包まれたガルベルダの拳から繰り出されるパンチは攻城戦に使われる砲弾を凌駕する。1度シェルターの外壁を殴ってこじ開けている姿を見たときは俺のちっぽけな腕力を嘲笑うかのような悪夢を見ているようだった。一撃でリッパーの顔面を陥没させたガルベルダは念入りに二発三発とその拳を繰り返す。そのたびにグシャ、ドガシャ、ガキョツと悲惨な音を立ててリッパーの顔面が潰れていく。

「ふん、いつまでも遊んでいるつもりならば終わらせるぞ？」そう言うとガルベルダは背中に背負っていた特大の剣に手をかける。しかしその直後にリッパーの体が膨れ上がり新たな刃を生やした腕を振り上げた。

「遅い！！」

ガルベルダはリッパーがくり出した全ての斬撃を大剣の腹で受け止めると、胴を風いだ。しかしリッパーはまだ倒れない。切断された断面から黒い紐のようなものを出し、千切れゆく己が半身を引き戻していく。しかもその全身がさきほどよりも巨大化していた。

すでにガルベルダより頭3つ大きい。ガルベルダはバックブースターで十分な距離を取ると、自身のジェネレーターをフルドライブさせる。銀と黒の装甲が瞬時に赤熱し、全身が眩く輝きを帯びると同時に、装甲のスライドした部分から金色の放熱板が顔を出す。直後

に再び肉薄したガルベルダは、先ほどの数倍の速度で大剣を叩きつけていた。六本の腕を交差して防御したリッパ―はそのままバターでも切るように腕を切断され、衝撃で直接斬られていない足すらもがれ、ダルマのようになりながら衝撃に胸郭を押し潰されていた。潰されたお多福のような顔が苦痛に歪み、黒い血のようなものをゲーゲーと吐く。

「スターク、お前の出番だ。きちんと働けよ」

「おう、今回は出血大サービスだ。こいつは効くぞ？これに籠められた魂の記憶の名前はジミー？アंक、生没年2000～2042、死因は大地震に遭遇した際に地割れにはまり、そのまま閉じた地割れによる圧搾死だ。死体は挽き肉だったそうだ。いくら狂魔神でも地獄の圧搾には堪えられまいよ……喰影苦！！《クエイク》」俺はリッパ―の足元に地割れを発生させ、そのまま地割れを閉じた。バキ、ゴキン、ボゴン、メキヨメキヨ……と最低な音を立てながらリッパ―は大地に咀嚼されていく。単純に戦闘能力だけでいえばガルベルダに勝てる人間なんていない。それは俺も例外ではない。さっき使っていた赤熱時のチャージを繰り出されたら俺など炭にしかないだろうし、狂魔神ですら一撃で行動不能に叩き込める。だがそんなガルベルダが俺と組む理由はこの魂葬術にあった。俺の術は生者だけでなく不死者にも絶大な効果を持つある意味反則技だ。かつてどこかで誰かの体験した地獄の苦しみを魔銃の弾丸とし、増幅して呪い殺す。どんな不死者だろうと、その怨念を上回る呪いで無理矢理殺すのだ。変わりに協力してもらった靈魂に安らぎを与えるのがハンターにして魂葬士たるこのスターク様の仕事だ。ジミーの魂が地面から浮かび上がり笑顔で消えていった。

「終わったな」

ガルベルダがグニャグニャに溶けた大剣を放り捨ててミッシェンの終了を告げた。先ほどの一撃はガルベルダ自身は無事でも、一瞬にして剣の寿命を使い果たしてしまったのだった。

「相変わらず不経済な奴め。しかし結局お前の妹とやらはどこに行

ったんだ？すっぱかしかな？」その時誰かが俺のレザーマントを引張った。振り替えると先ほどリッパーに追われていた少女がニッコリ笑顔でこう言った。「ガルベルダ兄さんの妹のエメラルダです。今日はご協力ありがとうございました」

「さっき来たと言っただろう？」

どこをどうすれば無敵魔神ガルベルダに美少女の妹が出来るのか：誰か俺に説明してくれ。意味がわからん。結局俺は小説よりも奇妙なるこの現状の理解にかなりの時間を要したのだった。

―ヘルオアヘブン―

「結局なんでリッパーは美女の顔を切り刻んでたんだろうな？」

ガルベルダがいつもの魔神オイルを一気飲みしながら俺とエメラルダに疑問をぶつける。俺は厚切りのステーキを頬張りながら考えていたが、エメラルダが先に答えた。

「あの人多分魔神苔か何かが入っちゃってたんじゃないでしょうか。元は綺麗な人だったんだと思います。だいたい歪な体になってましたから……それで多分きれいな人を見るのが耐えられなかったんじゃないでしょうか？」 魔神苔というのは魔神族の病気で、寄生型金属生命体が彼らの隙間に入り込み、構造を破壊してしまうのだ。おまけに基本フレーム下にまでひろがると致命的なまでの腐蝕まで引き起こす。外見は壊滅するだろう。これに対抗するために狂魔神になりあそこまで醜くなっていたのだとしたら皮肉すぎる。

「女はいくつになっても綺麗でいたいってことかね……」

「ふん、魔神苔など気合いと根性でいくらでも治せるものだ。これだから下等な奴は気に入らん。俺はあんな奴は同族と認めないからな」

俺の相棒は理知的で知られる魔神族の中では有り得ないほどの精神論者にして、その実践者であった。事件の被害者と加害者を殺したきっかけは皮肉にも美だった。しかしそんな懦弱なモノは我が頑強なる相棒には関係のないものだった。

余談だがほとんど人間種に見えるエメラルダも魔神オイルを一気

飲みしていたので、試しに一口もらって飲んだ俺は、ガソリン味のエリクサーという意味がわからないフレーズを残して白目を向いたのだった。

結局この日はギルドに報告をして仕事収めとした。

明日は下水道の人食い生物の駆除が待っている。さっさと寝てしまおう。

「薄っぺらな美などいらぬ。最も重要なのは気合いと根性だ」
(後書き)

2話目の読了ありがとうございました。作中のガルベルダの戦闘スタイルですが、ガルベルダに防御や耐えるという選択肢はありませんが、回避はありません。また、加速スペースを作るため以外にバックブースターも使いません。固すぎて攻撃が効かない、重いから推力で無理矢理動かす、力業で粉碎、と正攻法で最強キャラとしています。技も実はありますが、通常攻撃でコンストダメージ出します。ただ、アンデッドとか狂魔神みたいな特殊な止めが必要な化け物は行動不能まで粉碎できても止めがさせないのでスタークとの連携が欠かせません。またスタークはスタークで呪が発動すればほぼ必殺ですが、それ以外は普通に強いだけなので、ガルベルダがいないと強敵とは戦えません。ガルベルダは目立ちすぎるので調査とか潜入とかはスタークとエメラルダに頑張ってもらわざるを得ませんので各キャラの役割をしっかりと見極めて書いていきたいなと思います。

「僕様にエメラルダちゃん頂戴よろ」 (前書き)

※変な奴が増えます。亀人間はあの亀人間の外見を想像してお楽しみください。

「僕様にエメラルダちゃん頂戴よろこ」

「スターク、今日の仕事はお前に任せた。俺は緊急の依頼が入ったので、そちらを先にやらねばいけない。代わりにエメラルダを連れて行っていいぞ」

朝っぱらから俺が拠点としている宿屋のドアをもぎ取り、真っ裸で寝ていた俺をたたき起こした相棒の無敵魔神ガルベルダは一方的にそう言うのと、一緒に連れてきた鉄の塊のような外見の兄とは似ても似つかないその妹、エメラルダの背中を俺の方に押した。

「マジで言ってるのか？今日の仕事は下水の化け物退治だぜ？お前そういうの得意だろ？」

事態の把握に混乱する俺はまだ状況が飲み込めていない。

「うむ、歓楽街の15番ゲートに大型の獣が発生したらしくてな。すでに都市警察が包囲しているらしいが、でかすぎて火力が足りないそう。下水の奴よりも手ごわいと見ている」

だから自分はそっちと戦いに行くのだ、そんなことを言いながらドアのもげた俺の部屋の天井に風穴を開けると、背中からブースターを吹かして相棒はこの場を後にしたのだった。

「……行っちゃいましたね」

エメラルダはニツコリと笑いかけてきたが、内心俺は穏やかではなかった。たぶんこの宿屋からは今日で追い出されるのだろう。ガルベルダがまともに部屋に入ってくることなどまず無いのだから、奴が訪ねてきた段階でこの部屋がぶっ壊されることはわかってのことだ。少ない私物をまとめると情報確認と朝飯のためにヘルオアヘブンに出かけるのだった。

ーヘルオアヘブンー

切り裂き魔の事件が起きたくらいから下水道に人食いの化け物が出るという話があった。都市警察側の調査では人員を切り裂き

魔の調査に当てるために、こちらは場所が特定されてから出入り可能なエリアを閉鎖されただけで終わっている。

曰く、怪獣がいた。曰く亀がいた。曰く白い化け物がいた……どれも眉唾モノではあったが何かがいるのは間違いないらしく、下水管理局の人員数名が行方不明、浮浪者の死体がどぶ川に浮いていたなどかなり物騒なことになっている。俺とエメラルダは朝飯を食いながら今日の探索ルートと目的、そのための行程を詰めているところだった。ちなみに真っ裸でたたき起こされた俺の服装は、戦闘用の呪が編みこまれた装甲板をつなぎ合わせた強力な防御性能を誇る、魂葬士の装束の上から護符の付いた外套を纏うといった出で立ちに着替えてある。さりげなくエメラルダには全部見られたがお互いにそこは何も言わない。

「でだ、結局ガルベルダからは何も聞いてないんだが、エメラルダは何ができるんだ？」

相棒から一方的に押し付けられたエメラルダは種族は魔神族らしいがほとんど17、8歳の人間の少女にしか見えない。むしろ人間より全然線が細い分戦闘できるのか疑問である。基本的にハンターという仕事はチームを組むのがセオリーだ。前衛職2人と中衛1人、回復役と魔法が使える奴が1人いれば大体のことには対応ができる。俺とガルベルダの場合、ガルベルダが矛も盾もこなすので回復役はいらぬ。あいつと組んでから1年以上になるが、激戦を重ねてもダメージを負っている姿を見たことが無い。なので自然と俺が中衛と魔法使いをこなすことで大体の仕事がこなせてしまふのだった。ガルベルダがいないとそもそも前衛がいない。今回のような戦闘が確実にあり、敵の戦力が不明なミッションでは正直他に人を増やした方が妥当な判断だろう。

「大体何でもできますよ？ガルベルダ兄さん程ではないですけど前衛なら任せてください」

自身満々にそう言うが、まるでお姉さんぶってみたい学生のように見えて俺は不安だった。だがガルベルダの妹なわけだし……と思

案していると横合いから妙に甲高い不快な声が聞こえる。

「おねえちゃん見ない顔じゃ〜ん、僕様と一緒にフィーバーしない？」

横を見ると、このギルドでも結構有名なブルボン・アル・フォトがエメラルダに熱烈アピールをしていた。

ブルボンはこのグレイブランド共和国の子爵家の4男坊で、とにかく趣味、性格、女癖が悪いことで有名だった。以前仕事で剣の腕は見ているが、実力だけは確かで達人と言っている。年齢と、ハンターとしてのランクは俺とどこいってどこだろう。しかしこのルックスはすごい。古代の芸術家を作ったような鍛え上げられた体は腹筋が8つに割れているし、男らしすぎる顎も深く割れている。睫はすげえ長いしとにかく『濃い』そんな奴の服装はピチピチのレザーパンツに鋏のついたベストだけを身に付け、呪具らしいブレスレットをぶら下げている。その出で立ちに名前をつけるとしたら『『世紀末』だろうか……何かもう見てるだけで疲れる。ちなみにヘアスタイルは金髪をリーゼントにしているから服装と合わせて一度見たら忘れないだろう。

「ん〜？そこにいるのはスタークじゃなくい。何、この子お前の女？お前じゃ勿体無いから僕様に紹介しなさいよ〜お、僕様のハートはもうバッキンバッキンだよ〜お」

口をひん曲げながら、だらだらと語尾を延ばし色々と意味不明かつ失礼なことを言ってくれるブルボンは、無意味やたらに腰をカクカクさせている。こいつ危ないクスリでもやってないだろうな？

「ブルボンよ、お前が濃いののはわかったから少し黙れ。というかあっちに行っている。お前がいると今日の仕事の話が進まないんだ。それにな、この子はガルベルダの妹だぞ？うかつに手をだしたら潰されるぞ」

俺がアホでもわかるように丁寧に教えてやったにも関わらずブルボンはさらにテンションのおかしい笑い声を上げていた。

「堅物のスタークが冗談言うとは僕様驚いちゃったよ〜お。でもそ

れは無茶すぎだろーお」

少しテンションが戻ったのかへらへらと笑いながら俺もそう思いたい事実を冗談と切り捨て、じりじりとエメラルダの近くににじりよる。はっきり言って変質者にしか見えない……。エメラルダの水色の瞳はさっきから観察するようにマジマジとブルボンを見ている。「あの、提案があるんですが良いですか？」

その後エメラルダが口にした提案は数学的には正しかった。しかし俺は数学だけが正しいとは思わないことを初めて知ったのだった。ーロダイル下水道ー

「下水って割にはそこまで汚くないんだねーえ。もっとグロゲロだと思っていたよーお。Y E A A A ! !」

ロダイル下水道の支流一本一本は下手な国道並みに広い。通常は通路のど真ん中を下水が流れており、増水時などには今俺達が歩いている通路も下水として機能する多段構造で作られていた。ここ数年洪水などは起きていないため通路を歩く分にはたいしたゴミも汚水も流れていない。さすがに通路のど真ん中は悪臭を放つ汚水が流れているが、環境は思ったよりも良いようで、これなら浮浪者が住んでいても何ら不思議は無かった。白めのコンクリートで固められた通路内は年中気温が変わらず魔力灯がついており、雨風が無いことも考えれば外にいるよりも全然良いのだろう……。しかし今は件の事件の問題で浮浪者すらもいないが。……。それはいいのだが、ブルボンの野郎はどういう了見か大声を出して声の反響で遊んでいやがる。

エメラルダの提案はブルボンを戦力として引き込んだかどうかということだった。ブルボンの剣技は南都爆発剣なんとばくはつけんという秘伝の剣法で、切られた相手が爆死するとてもない攻撃力を誇る。見た目も言動も行動もアレな奴だが、実力だけを看破したエメラルダの眼力は、さすが魔神族といったところだろうか。

「スタークさん、何かが来ます」

全く感情の無い表情でエメラルダが敵の接近を告げると同時にブル

ボンが前に出る。俺も長剣を抜いて身構える。よく銃を撃つしか能が無いと見られている俺だが、そこの剣士よりは普通に使える自信がある。ガルベルダやブルボンと切り結んだら、次の瞬間ひき肉になるだろうが……。そんなことを一瞬考えつつも横道からやってきたのは亀人間だった…。

亀人間はミドリガメをそのまま人間大……といっても160センチあるかないかくらいのサイズで、関節にはボロボロの包帯を巻き、大陸東部の蛮族が使っているような片刃の大刀を二本背負っていた。左右で別々の場所を見ている視点の定まらない顔が不気味だ。

ここグレイブランドには色んな人間がいるが亀人間なんて種族は存在しないし、多種多様な魔神族だって魔神族っぽい特徴と言うものはあるのだ。現にほとんど人と変わらないエメラルダもいたるところに機械っぽいパーツがついている。仕事柄、色々な種族の生物とも遭遇してきたが、ここまで適当な生き物は初めて見る。

「ロダイル下水道へようこそ！俺はレオパルド、こっちは師匠のスプラッター先生がいるぜ！！もちろん会いに来るよな？」

とりあえず共通語は話すようだがどこことなくブルボンと近いテンションのセリフに頭痛がする。

亀人間の正体も意図もわからないが、ブルボンがそのままレオパルドと名乗る亀人間と一緒に奥に行ってしまったので俺とエメラルダも後に続いたのだった。

—スプラッターハウス—

「うんまーい！！、何この食い物は？僕様程のお金持ちでもこんなもの食べたこと無い！！」

そう言いながらブルボンはレオパルドの出してきた円形の薄いグロテスクな食べ物をもりもり食っていた。正直俺には、あいつの神経がわからん。

「スプラッター先生、だったか？お尋ねしたいんだが……あんた何時からここに住んでるんだ？最近この区画に巨大な人食い生物を

見たことは？」

ブルボンとレオパルドは放置して俺はスプラッター先生と呼ばれていた人狼ワーウルフに声をかける。

変な亀人間と違いスプラッターは白銀の毛並みを持つ銀狼族というれっきとした人類の仲間である。彼はプライドの高そうな金色の眼を俺に向けると語り出したのだった。

「元々、私は流れの傭兵をやってこの国にたどり着いた。自慢ではないが腕に自身はあったし、私が参加した戦闘は歴史上かなり大事なものが多し」

そう言っただけで彼の出した戦いの名称は大陸の地図を塗り替えるような大きな戦いを決定するものばかりだった。

「やがて戦乱も少なくなり、傭兵から身を引いた私はこの町でハンターとして登録をし、日々の暮らしを送っていたのだが……ある依頼を受けた際にはめられてな、追っ手を全て斃したことで依頼人は私を狂戦士としてギルドに告発し、今ではすっかり指名手配中の凶悪犯というわけだよ。さすがの私もその時の戦いで深手を負ってしまったしな。それで昔の作戦で隠れ家として使っていたここに潜伏していたわけなんだが……それが大体2年前か。それからしばらくして、ある日そのレオパルドと3匹のミドリガメを拾ったのだが、それは奴らの罠の副産物だった。あいつらは私がここに潜伏しているだろうことを嗅ぎ付け、私を消すために下水道に魔獣突然変異剤を垂れ流しにしたのだ。」

「何だそれは？というかレオパルドって突然変異の魔獣だったのか」
「ああ、そもそも私が狙われるきっかけとなったのは奴らが魔獣突然変異剤を都市の住人に使い始めたからだ。あれに触れるとその者の才能にもよるのだろうが、普通より強力な魔獣に変成してしまうのだ。レオパルド達は幸いと言うか幼体から成長したため私は彼らに武術と教育を授け、この下水道の治安を維持していたのだが……先日出現した化け物に3人が食われてしまった」

残念そうなスプラッターには申し訳ないが、レオパルドみたいな

亀人間を3匹も食う化け物ってのはどんなもんだか……。しかしそいつが今回の討伐対象で間違いないようだ。

「ラファゲロ、ヒゲランジェロ、ドナゲレロ、みんな良い奴だったのに……。僕は許せない!!」

「いよし、よく言った。あ！僕様達が協力するからその化け物をサクッと殺っちまおうぜえ？」

いきりたつレオパルドと勝手に話を進めるブルボン……。レオパルドの実力は実際のところわからないが、結局スプラッターも協力してくれることになり下水道攻略チームは前衛4人、中衛一人の歪なパーティとなった。

下水道の主の巣一

レオパルドの先導で俺達がたどり着いたのは、よく下水に流されてしまうワニ類の仲間の目の前だった。ただし全長20mは固いと思う。

どう見ても異常な生き物で、表面は鱗ではなく金属質の装甲を纏い、腕は8本、口というか、眼のないワニの頭が4本も生えていた。俺は少し下がったところでアレに効きそうな呪弾の選択に入る。

「くらえ、みんなの仇!!」

しっかり準備をしてからしかけようと考えていた俺を置いて、空気の読めないレオパルドが背中中の二本の大刀で斬りつける。一瞬刃が食い込み血がにじむが次の瞬間には再生されてしまう。ワニの反撃で噛まれそうになったレオパルドが慌てて後ろに跳び退る。入れ違いでそこに飛び込む濃い男が一人。

「レオちゃん、ここは僕様に任せなさい」

そう言ってごつい装飾の施された幅広の銀色に光る剣を構えたブルボンは必殺の南都爆発剣を繰り出す。アホだし濃い奴だが戦闘だけでは頼りになる。直撃を受けた3mはあろうワニの頭がはじけとび、血のシャワーを降らす。

スプラッターも負けておらず、ワニの頭にレオパルドの持つ大刀よ

りもさらに巨大な片刃の剣を叩き込んでいた。

「どうだ、先生は最強なんだぞ!!」

後方に引いたはずのレオパルドが自分のことのように自信満々に言い放つ。あいつ結構余裕だな。エメラルダはリーチが短いからか、ワニの顔に近寄れず、さっきからけん制するので手一杯のようだ。前衛が出来ようとできまいと、あんなでかい化け物相手では仕方が無い。正直な話、珍妙なレオパルドもあまり役に立っていないが、戦闘力はかなり高いと言える。実際ブルボンを連れて来ていなかったらスプラッターとレオパルドも仲間にならなかっただろうし、攻撃できなくても彼女は充分すぎるほど役に立ってくれているだろう。

俺はというと、あのワニに有効な呪弾をぶち込むために、絶賛スクロールの展開中だ。何も知らない奴らはよく呪弾のストックを作っておけと言ってくるのだが、人の怨念、それも飛び切り重い奴を絶えず所持し続けることは不可能だ。ガルベルダなら持参してても影響なさそうだが普通の人間は間違ひなく精神を蝕まれるか、運が低下して死ぬ。魂葬士が使役する魂というのは、苦痛から開放してやるから一瞬だけ言うことを聞いてくれという契約に基づいて使役が可能になるのだ。おまけにあんなでかい化け物に効くようなものはそうそう想定しえないだろう。

俺が選択を進める最中にも戦闘は進んでいく。ブルボンとスプラッターの実力はやはりすさまじいの一言で、二人が動いたびにワニの体が破損していく。しかし、ワニは一向にその生命力を衰えさせない。それどころか牙の生えた触手を放出しやがった。スプラッターとレオパルドの足に噛み付き、絡みついたその触手は、二人を壁に叩きつける。嫌な音を立てながら痛めつけられた二人は放り捨てられ、他の触手を避けていたブルボンに空いた触手までが殺到する。ダクトの中を回り込んだ触手がついにブルボンの肩に噛み付いたとき、今まで俺の前でワニの攻撃を避けていたエメラルダが動いた。

「てやあ!」

あんまり派手な発声ではなかったが、気合を入れたエメラルダの背負ったバックパックが展開し、ガルベルダを髣髴させるブースとダッシュを仕掛ける。爆発的な加速度で輪にに接近したエメラルダは、発光させた右手の平をワニの頭に叩きつけると、そのままワニの本体が30mほど後方に押し込まれ、通路の壁にめり込ませたのだった。

「ひゅーう！！惚れたよー」

肩から血を流したブルボンは傷のことなど忘れたようにエメラルダに見とれていた。壁にめり込んだワニは抜け出せずにもがいているがエメラルダも先ほどの一撃でエネルギーを使いすぎたのか距離を取って動かない。ようやく俺の呪弾の準備が整った。

「こいつの名前はアルバン・フック、生没年は1022年から1068年、ファルガーの海戦に参加して戦士した海賊船の船長だ。こいつの死んだ海はワニが多くてな。腕を斬られ船から落ちたアルバンは全身をワニに食いちぎられてばらばらになりながら死んでいったんだ。共食いで死ね……陰多唾音鎖韻！！《インターネサイン》」

俺の魔銃から禍々しい赤いオーラを纏った弾丸がワニの頭に着弾すると同時にワニの腕と頭が次々に引き裂かれていく。しかしワニもさるもの、引き裂かれる傍から自己再生をしていくが、復活したスプラッターとレオパルドがのた打ち回るワニに追撃をかける。ブルボンも次々にワニを爆発させていく。結局それから数分間攻撃が続いたところでワニは呪弾に食い殺されたのだった。

後には血だまりとワニの残骸。根棒、サイ、ヌンチャクといった武器が落ちていた。

「そいつはお前の兄弟の形見か？」

俺はテンションの低いレオパルドに尋ねてみた。どうも重い雰囲気は好きじゃない。

スプラッターに視線を移すも、彼もレオパルドに何と声をかけて良いのかわからないようだった。しかし

「え、全然関係ないゴミだよ？僕ら全員剣しか使えないし」

人がせっかく心配してやったのにこのクソ亀は台無しにしてくれやがった。

おまけにブルボンが追撃をける。

「レオパルド、元気だせようお。またあの丸くて薄いベチャベチャしたの食えばお前もカワバ〇ガ……」

「そうそう、あれ食うとテンションあがるよな。」

「ああ、でもあれ何て名前なんだろうな？」

「しらね」

ブルボンがレオパルドに意味のわからない慰めの言葉をかけるとブルボンの横にいたレオパルドとブルボンの後ろにいたレオパルドとブルボンの前にいたレオパルドがその声に応えたのだった。

結局レオパルドの兄弟達はワニに飲まれたものの、消化されることなくずっと胃袋の中に住んでいたらしい。

「お前達には世話になったから一つ忠告をしておいてやろう。教会のディクト枢機卿には気をつける……あの男は危険だ。狂魔神からの事件があれば、あの男が裏にいるぞ」

スプラッターはそれだけ言うのと亀4兄弟を伴って再びスプラッターハウスに帰っていった。

俺はエネルギー切れでフラフラと眠そうなエメラルダと、レオパルドにまた遊びに行く約束をしたブルボンを連れて地上へと帰ったのだった。

ーヘルオアヘブンー

「と、まあ収穫はこんなとこだな」

俺は地上に帰ってくると酒場兼ギルド本部のヘルオアヘブンに報告を済ませ、戻ってきたガルベルダと今日の首尾について話をしてた。エネルギーの少なくなったエメラルダは既に魔神オイルを3本も飲んでた。ストローを刺してチューチューと吸っている様は幼児が牛乳を飲んでいるようで微笑ましい光景だ。俺はいつものス

テーキに食らい付き、人生の幸せをかみ締める。

「ガルベルダゝあ、エメラルダちゃん僕様に頂戴よくお」

さりげなくブルボンも一緒に席にいたりする。さっきからブルボンはエメラルダとの結婚を前提とした付き合いをさせてくれとガルベルダを説得しようとしていた。

「断る。お前の耐久力では俺の親戚は務まらないからエメラルダはくれてやらぬ」

しかしガルベルダは意味不明な断り方で断固拒否していた。変な光景だ。今日は散々な一日だった……明日は良いことがあると良いんだが、と俺は思いつつ明日の悪魔退治の依頼について打ち合わせをして今日の仕事納めとしたのだった。

「僕様にエメラルダちゃん頂戴よろ」 (後書き)

読破ありがとうございます。今回は昔好きだったあいつらのパロキヤラを出してみました。名前とかいい感じにグダグダにしてあるので笑ってもらえたら幸いです。ブルボン……名前をそのままつなげると……あれおいしいですよ。次回はようやく長編になるような御話につなげていきますので見守っていただければと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7357/>

ハンティング！

2010年10月8日23時45分発行